

解析学 II 演習 4 解答

解答 4.1.

(1) 内積 (f, φ_n) , $n \in \mathbb{Z}$ を計算する. $n = 0$ に対して

$$(f, \varphi_0) = \int_0^{2\pi} x \frac{1}{\sqrt{2\pi}} dx = \pi\sqrt{2\pi}.$$

$n \neq 0$ に対しては部分積分により

$$(f, \varphi_n) = \int_0^{2\pi} x \frac{e^{-inx}}{\sqrt{2\pi}} dx = \frac{i\sqrt{2\pi}}{n}.$$

よって f の Fourier 級数展開は

$$\sum_{n \in \mathbb{Z}} (f, \varphi_n) \varphi_n(x) = \pi + \sum_{n \neq 0} \frac{i}{n} e^{inx}.$$

(2) $n \neq 0$ に対して

$$(f, \varphi_n) = \int_0^{\pi} (-1) \frac{e^{-inx}}{\sqrt{2\pi}} dx + \int_{\pi}^{2\pi} \frac{e^{-inx}}{\sqrt{2\pi}} dx = \sqrt{\frac{2}{\pi}} \frac{e^{-in\pi} - 1}{in}.$$

$(f, \varphi_0) = 0$ であるから, これらをまとめて

$$(f, \varphi_n) = \begin{cases} 0 & (n \text{ が偶数}), \\ \frac{4i}{\sqrt{2\pi n}} & (n \text{ が奇数}). \end{cases}$$

よって f の Fourier 級数展開は

$$\sum_{n \in \mathbb{Z}} (f, \varphi_n) \varphi_n(x) = \sum_{n \in \mathbb{Z}} \frac{2i}{\pi(2n-1)} e^{i(2n-1)x}.$$

解答 4.2.

(1) f と φ_n の 2π 周期性を用いて

$$(T_\theta f, \varphi_n) = \int_0^{2\pi} f(x-\theta) \frac{e^{-inx}}{\sqrt{2\pi}} dx = \int_0^{2\pi} f(x) \frac{e^{-in(x+\theta)}}{\sqrt{2\pi}} dx.$$

よって $(T_\theta f, \varphi_n) = e^{-in\theta} (f, \varphi_n)$ が成り立つ.

(2) 変数変換 $x \rightarrow -x$ により

$$(Rf, \varphi_n) = \int_0^{2\pi} f(-x) \frac{e^{-inx}}{\sqrt{2\pi}} dx = \int_0^{2\pi} f(x) \frac{e^{inx}}{\sqrt{2\pi}} dx.$$

よって $(Rf, \varphi_n) = (f, \varphi_{-n})$ が成り立つ.

解答 4.3.

(1) まず, $f * g$ が 2π 周期になることは明らか. Hölder の不等式より

$$|f * g(x)| \leq \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_0^{2\pi} |f(x-y)g(y)| dy \leq \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \|f\|_2 \|g\|_2.$$

ゆえに

$$\begin{aligned} \|f * g\|_2^2 &\leq \int_0^{2\pi} \frac{1}{2\pi} \|f\|_2^2 \|g\|_2^2 dx \\ &= \|f\|_2^2 \|g\|_2^2. \end{aligned}$$

(2) 次の計算から, $c_n = a_n b_n$ となることがわかる.

$$\begin{aligned} c_n &= \int_0^{2\pi} (f * g)(x) \overline{\varphi_n(x)} dx \\ &= \int_0^{2\pi} \left(\frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_0^{2\pi} f(x-y)g(y) dy \right) \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-inx} dx \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \int_0^{2\pi} f(x-y)g(y) e^{-inx} dx dy \\ &= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} g(y) e^{-iny} \left(\int_0^{2\pi} f(x-y) e^{-in(x-y)} dy \right) dx \\ &= a_n b_n. \end{aligned}$$

補足 ($f * g$ の可測性): この問題において, convolution

$$f * g(x) := \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_0^{2\pi} f(x-y)g(y) dy$$

が $L^2(S^1)$ の元として定義できるためには, まず可測になることが必要である. そのために $f(x-y)g(y)$ が $S^1 \times S^1$ 上の Lebesgue 可測函数であることを確認する必要があるが, それには次のことに注意すればよい.

$\Psi(x, y) := x - y$ とおくと, $\Psi: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ は $\mathcal{L}_2/\mathcal{L}_1$ -可測. ただし, \mathcal{L}_d は d 次元 Lebesgue 可測集合全体.

(\therefore) まず, Ψ は連続函数なので, Borel 可測であることに注意する. 次に, 以下を示そう.

$$N \in \mathcal{B}_1, m_1(N) = 0 \implies m_2(\Psi^{-1}(N)) = 0. \tag{N}$$

(ただし, m_d は d 次元 Lebesgue 測度, \mathcal{B}_d は d 次元 Borel 可測集合全体である.) 実際,

$$\begin{aligned} m_2(\Psi^{-1}(N)) &= \int_{\mathbb{R}} \left(\int_{\mathbb{R}} 1_{\Psi^{-1}(N)}(x, y) dx \right) dy && \text{(Fubini の定理)} \\ &= \int_{\mathbb{R}} \left(\int_{\mathbb{R}} 1_{N+y}(x) dx \right) dy \\ &= \int_{\mathbb{R}} \left(\int_{\mathbb{R}} 1_N(x) dx \right) dy && \text{(Lebesgue 測度の平行移動不変性)} \\ &= 0 && (m_1(N) = 0 \text{ より}) \end{aligned}$$

なので, (N) が示された.

そこで $X \subset \mathbb{R}$ を Lebesgue 可測集合とすれば, Borel 可測集合 $B_1, B_2 \subset \mathbb{R}$ が存在して次をみtas.

$$B_1 \subset X \subset B_2, \quad m_1(B_2 \setminus B_1) = 0.$$

いま, Ψ が Borel 可測函数なので $\Psi^{-1}(B_1), \Psi^{-1}(B_2)$ は Borel 可測であり, また, (N) により,

$$\Psi^{-1}(B_1) \subset \Psi^{-1}(X) \subset \Psi^{-1}(B_2), \quad m_2(\Psi^{-1}(B_2) \setminus \Psi^{-1}(B_1)) = 0$$

が成り立つ. したがって, $\Psi^{-1}(X)$ は Lebesgue 可測.

解答 4.4. (1),(2) 修正: “ $f \in C^\infty(S^1)$ ” \implies “ $f \in C^\infty(S^1), f \neq 0$ ”

(1) 部分積分によって $(\Delta f, f) = -(f', f')$ となるのがわかる. また, 仮定より $(\Delta f, f) = -\lambda(f, f)$ ゆえ, $\lambda(f, f) = (f', f')$ である. $f \neq 0$ より $(f, f) > 0, (f', f') \geq 0$ なので, $\lambda \in [0, \infty)$ が成り立つ. (もちろん, $f \in C^\infty(S^1)$ より $(f', f') < \infty$ である.)

(2) Δ は線型作用素であり, $\Delta \varphi_n = -n^2 \varphi_n$ が成り立つので充分性は明らか. そこで必要性を示す.

(1) より $\lambda \geq 0$ なので, 微分方程式 $\Delta f = -\lambda f$ の一般解は

$$f(x) = ae^{i\sqrt{\lambda}x} + be^{-i\sqrt{\lambda}x}$$

と書ける. これが周期境界条件, すなわち $f(2\pi) = f(0)$ をみたしているので,

$$f(2\pi) = ae^{i\sqrt{\lambda}2\pi} + be^{-i\sqrt{\lambda}2\pi} = a + b$$

が成り立つ. 今 $f \neq 0$ を考えており, $(a, b) \neq (0, 0)$ であるから $\lambda = n^2$ が従う. ゆえに (係数を変更すれば)

$$f(x) = a' \varphi_n + b' \varphi_{-n}$$

となるので, 題意が示された.

(3) S^1 は測度有限なので $L^2(S^1) \subseteq L^1(S^1)$ となり, $u_0 \in L^1(S^1)$ である. 従って u_0 の Fourier 係数は一様に有界, すなわち

$$|(u_0, \varphi_n)| \leq \int_0^{2\pi} |u_0(x) \varphi_n(x)| dx = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \|u_0\|_1, \quad (\forall n)$$

が成り立つ. 表記を簡単にするために $f_n(x, t) := e^{-n^2 t} \varphi_n(x)$ とおく. つまり $u(x, t) = \sum_n (u_0, \varphi_n) f_n(x, t)$ とする. f_n の導関数を計算すると

$$\partial_{l,m} f_n := \frac{\partial^{l+m} f_n}{\partial x^l \partial t^m} = (in)^l \cdot (-n^2)^m \cdot e^{-n^2 t} \varphi_n(x), \quad l, m \geq 0$$

となる. これにより, 任意に $\delta > 0$ を固定するごとに, 級数 $\sum_n (u_0, \varphi_n) \partial_{l,m} f_n, (l, m \geq 0)$ は $S^1 \times [\delta, \infty)$ 上一様に絶対収束するので, $u(x, t)$ は $S^1 \times [\delta, \infty)$ 上 C^2 級 (実は C^∞ 級) である. (演習 1.1 も参照せよ.) $\delta > 0$ は任意であったから, $u(x, t)$ は $S^1 \times (0, \infty)$ 上 C^2 級である. さらにこのとき $u(x, t)$ は項別微分可能であり, 各 $f_n(x, t)$ は問題の微分方程式をみtasすから, $u(x, t)$ も方程式をみtasす.

最後に初期値への収束を示そう. まず, $\{\varphi_n\}$ は $L^2(S^1)$ の完全正規直交系なので L^2 の意味で $u_0 = \sum_n (u_0, \varphi_n) \varphi_n$ が成り立つ. さらに, Parseval の等式から $\sum_n |(u_0, \varphi_n)|^2 = \|u_0\|_2^2 < \infty$ が成り立っており, これから $\|u_t\|_2^2 = \sum_n |(u_0, \varphi_n)|^2 e^{-2n^2 t} < \infty$, すなわち $u_t \in L^2(S^1), (\forall t \geq 0)$ が従う. そこで再び Parseval の等式を使えば,

$$\|u_0 - u_t\|_2^2 = \sum_{n \in \mathbb{Z}} |(u_0, \varphi_n)|^2 (1 - e^{-n^2 t})^2 \rightarrow 0 \quad \text{as } t \downarrow 0$$

となる. (最後の部分で, $|(u_0, \varphi_n)|^2 (1 - e^{-n^2 t})^2 \leq |(u_0, \varphi_n)|^2$ と Lebesgue の収束定理を使った.)